

こんでいたのです。しかも死体の長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめると、老婆の姿を見ても、一本消えて、激しい憎悪の気持ちが出てきたのは、下人の正義感だと思います。人間は正義感とか善悪を区別する判断能力を持っていないはずで、下人は生きることだけに精一杯で心の奥のどこかにかくれていた正義感が老婆に対する憎悪になったんだと思います。極端かもしれないけど、うえ死にすることが善で盗人が悪と考えるなら、この時の下人はきっとうえ死にすることを選んだはずで生きていくためには盗人になるしかないなんてなんだか悲しすぎます。

さらに、人がいるんな心を持っているんだと不思議に思ったのは、下人が老婆を刀でおどした後、老婆に対する憎悪が消えてしまったという事です。これは、下人が老婆の悪を正したいという自己満足なんですよ。

また下人の心は変わります。老婆が抜いた

髪の毛でかつらをつくるという答えに、また
 憎悪を感じるというのは、もったいい答えを
 望んでいて、裏切られたように思ったのだと
 思います。
 そしてとうとう下人は盗人になることを選
 びました。それは老婆の、うえ死にしないた
 めに悪いことをいっぱいしてきたのだから死
 人が髪を抜きとられるのは当然だ、自分もう
 え死にしないために髪の毛を抜いているのだ
 という自分に都合のよい言い訳を聞いてしま
 ったからだと思えます。自分の悪を人のせい
 にしてしまつた老婆は下人に着物をはぎとら
 れてしまふから少しかわいそうだけど、自業
 自得だと思えます。老婆の着物をはぎとつて、
 とうとう盗人となつた下人。「老婆と同じ目
 にあつちやうよ。」と私は言つてあげたいです。
 人の心は、人のかかわり方や状況で何と
 でも変わるものだと思えます。やっぱり自己
 中心がいけない訳じゃないけど、善悪の判断
 の難しさをこの本を読んで知りました。